

障害者殺傷事件から1年

意味なき

命はない

⑥

「入所施設は閉鎖的だと思っていたので、息子が喜ぶにはグループホームがいいと思っていました。けれど、グループホームでは(制度上)得られる支援が足りないので無理だと考えなおしました」

自主性尊重する

こう話すのは、長谷部浩子さん(53) 埼玉県川越市 2 丁目です。市内の入所施設で暮らす長男(31)は、知的障害があり自閉症です。ちょっとした変化でパニックを起こし、自傷行為をすることもあります。

グループホーム 障害者の暮らしの場の一つ。障害者が街中の住居で、主に夜間から朝にかけて世話人などから日常生活上の支援を得ながら共同生活を行います。一方、入所施設は24時間体制で支援をします。

長男と話を重ね、「30歳で入所」を共通認識にしてみました。生活環境ががらりと変わったときに、不安定になることが予想されたからです。長男が通う作業所を運営する社会福祉法人が、長男が23

障害者家族らの願い

入所施設で、仲間たちと豊かな暮らしを築いています(本文とは関係ありません)



歳になる年に入所施設を開所しました。30歳を待たずに長男はすぐに入所したいと望むように。以来、自宅を過ごす週末を除き、入所施設で暮らしています。社会福祉法人は入所施設を

つくる際、障害のある仲間や親、職員らで、どんな施設がいいか話し合い検討しました。強度行動障害のある仲間が多くいても、外から鍵をかけることは決してしません。日中は、敷地内の作業棟に向かう仲間もいれば、他所の作業所に通う仲間も。入浴時間や食事の仕方なども自主性を尊重するようにしています。「地域の人たちとの交流も多いし、まったく閉鎖的ではありません」と長谷部さん。

施設が「居場所」

一方、障害福祉施策の制約で、外出に制限があるなど家での暮らしと同じようにはできない部分もあります。「自由を奪っているのは施設ではありません。制度が縛っているのです。施設職員や親は改善を求めて運動しています」

入所後、長男が自宅に戻ると、長谷部さんに用事があると、長男は留守番をせず一

緒に出かけたがるように。ある時、長谷部さんが留守番を頼むと、長男は入所施設で過ごすことを選んだといいます。入所施設が長男にとって「居場所」になっていると感じた瞬間でした。長谷部さんは「親亡き後の準備ができた」と感じました」と喜びます。播本裕子さん(67) 大阪府吹田市 2 丁目 グループホームで暮らす三男(34)も知的障害と自閉症、強度行動障害があります。「入所施設の広い空間と大勢の仲間に出会って暮らした経験があるからこそ、いまは落ち着き、グループホームで暮らせるようになったのだと思います」

相模原市の入所施設「津久井やまゆり園」での殺傷事件に結びつけて、入所施設否定の声の一部が出ています。播本さんは強調します。「重度障害者が安心して暮らし続けられる場として入所施設は必要です」

自由奪ってている制度

「重度障害者が安心して暮らし続けられる場として入所施設は必要です」 (つづく)